

徳島・觀音寺遺跡

1 所在地 徳島市国府町觀音寺

2 調査期間 一〇〇四年（平16）四月～一〇〇五年二月

3 発掘機関 徳島県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 杉本昌弘・小川勝幸・大橋育順

5 遺跡の種類 自然流路

6 遺跡の年代 奈良時代・平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(川 島)

觀音寺遺跡は、鮎喰川西岸に形成された標高七・八mの沖積平野上に位置する。徳島環状線の建設に伴つて一九九六年度から発掘調査を実施しており、一九九七年度には、自然流路から「論語木簡」を含む七・八世紀の木簡七四点が出土している（本誌第10号）。

一〇〇四年度の調査区は、そこから北へ三〇〇m離れた地点で、八世紀後半から一〇世紀の自然流路の堆積

層から三〇点の木簡が出土した。この流路は幅約八〇mの流域をもち、南東から北西への流れであることを確認した。これは、一九九七年度に調査した流路とは別の流れであると考えられる。木簡はこの流路の中洲周辺に散在した状況で出土した。今回紹介する木簡は、(1)～(6)が八世紀後半から九世紀にかけて、(7)～(9)が一〇世紀の堆積層から出土したものである。この他に、六点の墨書き土器が出土した。また、人形や舟形、斎串などの木製祭祀具、木錘や糸巻き、曲物などの木製品が多数出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) ×平寶字八年一月十日附使□金進上〔弓カ〕
(198)×(37)×5 019

(2) •「進上□□作□□」

•「海廣海海」 195×(35)×3 081

(3) •「召栗永□〔繼カ〕」

•「知カ」
•「副使□」

(112)×(50)×5 081
(105)×17×4 081

(4) ×殖栗郷秦□嶋」

(5) •「く皮麦五口阿波郡□」

•「く 八月七□」

(96)×16×4 039

(6)	「 <u>生螺百貝</u> 」	119×21×5 032
(7)	「 <u>名カ</u> 」	370×47×8 011
(8)	「 <u>東郡人安曇継見</u> 」	153×47×7 061
(9)	「 <u>白米処</u> 」	
	「 <u>□□得人</u> 」	225×68×6 011
	「 <u>書生□□虫</u> 」	

(1)は上端部を欠損し、左辺は割裁されているが、ほぼ完形である。

天平宝字八年（七六四）の紀年銘がある。

(2)は文書木簡の中央部を縦に割裁して廃棄したもの。保存状態が悪く、表面左、裏面上部に加工痕はみられない。下端は一度に切断されている。裏面は習書である。

(3)は表裏両面ともに細かい加工痕がある。表面左側上部に多数の削りが確認できる。右辺は欠損している。上端は両面からの削りで、薄くなっている。断面の木目は裏面へ向かって僅かに丸くなつており、裏面が木芯側である可能性がある。召文木簡である。

(4)は上部が欠損している。殖栗郷は『和名抄』に見える名方郡殖栗郷にある。表面は左側を細かく削つた後に、右端を一気に削つている。裏面には削りはない。

(5)は上部の左右両辺に上下から刃を入れて三角形に切り欠きを施すが、三角形頂点まで刃が入っていない。表面には細かい加工痕がある。

見られるが、裏面は左右両辺を細く削つただけである。

(6)の墨痕は不明瞭である。全体的に傷みが激しいが、表面には明瞭に加工痕が確認できる。上部の両側面に緩やかな切り欠きがある。裏面は全体に刻線がみられる。

(7)は表面に加工痕が多数確認できるが、墨痕は薄い。断面は文字側が薄くなつており、文字を書くために加工したと考えられる。右辺は上部に刃を入れて割つている。名東郡は寛平八年（八九六）に名方郡を東西に分割して設置された。

(8)は題籤軸状である。軸上部で折れている。軸位置が左右対称でないことから、二次的な使用の可能性もある。表面は細かく加工し、側面は文字面側を丁寧に角取りしている。右辺には擦つたような傷が三ヵ所確認できた。題籤部分の上部に一ヵ所、下部に一ヵ所の抉りがみられる。

(9)は加工痕が多数確認できるが、表面は比較的滑らかで、ほぼ完形である。上端には細かい加工痕は見られないが、下端は丸く整形されており、曲物の蓋や底板を転用した可能性もある。

なお、釈読にあたつては京都教育大学の和田萃氏のご教示を得た。

9 関係文献

(財)徳島県埋蔵文化財センター『徳島県埋蔵文化財センター年報一

六 二〇〇四年度』(二〇〇五年)

